## 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近世における一漁村の人口動態 : 紀伊国牟婁郡須賀利浦			
Sub Title	The population of a fishery village in the Rokugawa era			
Author	速水, 融			
Publisher	慶應義塾経済学会			
Publication year	1953			
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.12 (1953. 12) ,p.1031(63)- 1039(71)			
JaLC DOI	10.14991/001.19531201-0063			
Abstract				
Notes	資料			
Genre	Journal Article			
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19531201-0063			

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

趙寅 Vail, Grether, Cox: op. cit. p. 679.

进份 Vail. Grether, Cox: op. cit. p. 673. はげしい通りを横切る必要もなく、サーヴィスをうけるために二三分以上も待たなければならないようなこともないであろう」。 方反對の場合は「給油所は廣く各地に分散しており如何なる自動車も一マイル以上も走らなければならないことはなく、又交通の にはガソリンを購入する機會はなく、彼がガソリンを補給するためには自分の家まで歸らなければならないであろう」。 提供せられるサーヴィスが極端に制限せられた場合は「消費者は特定の給油所で特定の時間が割り當てられ、そしてそれ以外

(The Journal of Capital Management, Sept. 1942) pp. 211—14; P. W. Stewart, L. Field and J. F. Dewhurst, "Does Distribution Cost Too Much? 1939; J. K. Galbraith and J. D. Black, "The Quantitative Positon of 相當の距たりがみられる。 Marketing in the U.S.," (Quarterly Journal of Economics, May 1935) 以上の四つの資料を比較してもその結果には W. Huegy, "Elements of Marketing" 1942, p. 817; N. H. Engle, "Marketing Costs and Efficiency" 例えば配給費の調査においても調査者の異るに應じてその結果もかなり異つたものとなつている。 P. D. Converse and

## 資料

## ――紀伊國牟婁郡須賀利浦――近世における一漁村の人口動態

心水融

近世漁村の人口については一般にその變動が激しかつたと考えられている。當時の識者の限にもこの事はかなりの程度に映すること極めて甚しく、老若男女枕を並べて餓死し、一村人烟すること極めて甚しく、老若男女枕を並べて餓死し、一村人烟することであること往々にありて、予此を目撃せり。」(註)と言を絶するに至ること往々にありて、予此を目撃せり。」(註)と言をの變動がどの程度であつたのか、その内容如何についての具その變動がどの程度であつたのか、その内容如何についての具をの變動が後しかつたと考しない。

般的見解である。
になつているが、實際は信淵の著書であろうと言うのが一になつているが、實際は信淵の父信季によつて書かれた事なおとの著書は安永九年信淵の父信季によつて書かれた事

近世における一漁村の人口動態

しかし漁村人口といつでも、その内容によつて包撮される範圍が異つて來るのは勿論である。第一に、漁村の如く季節的勞動、選別には附近の農村や又は一部の漁村から加子勞働力が入り込み、是等は漁期が終れば歸村してしまう。第二に、數年數村の住民だつた者が漁場を求めて出てしまう。第二に、數年數付の住民だつた者が漁場を求めて出てしまう。第二に、數年數人が與えた影響は、耕作地の少い漁村にとつて農村以上に深刻災が與えた影響は、耕作地の少い漁村にとつて農村以上に深刻災が與えた影響は、耕作地の少い漁村にとつて農村以上に深刻災が與えた影響は、耕作地の少い漁村にとつて農村以上に深刻災が與えた影響は、耕作地の少い漁村にとつて農村以上に深刻の大場である。

しかし他方、特に孤立的な漁村においては、四園の開けた農村に比し、流行病による被害から免れる事ができたし、又廻船にせよ、饑饉の年と雖も主食類の購入が容易ででもあつた。商にせよ、饑饉の年と雖も主食類の購入が容易ででもあつた。商にさ、饑饉の年と雖も主食類の購入が容易ででもあつた。商にさ、饑饉の年と雖も主食類の購入が容易ででもあった。商とするものである。少くも、その年間の變動はさて置き、反省させるものである。少くも、その年間の變動はさて置き、反省させるものである。少くも、その年間の變動はさて置き、反省させるものである。少くも、その年間の變動はさて置き、反省させるものである。少くも、その年間の變動はさて置き、方のである。

送についてすら密賣買が認められる以上、商人間の納屋米多量の米を取引し、是が露顯した事件――の如く、城米輸御城米廻船船頭と地元庄屋との結託により、難船と詐つて(註) たとえば、天保年間、志摩國波切村で生じた事件――

大三(一〇三)

される。 **廻船についてはかゝる不正取引は日常事であつた事と推測** 

の概觀と使用した史料について若干觸れておきたい。 **變勁を史料により實證するのであるが、本論に入る前にこの村** 本稿においては、 のような見地から一漁村における人口の

**釣及び細魚(=さんま)** あつた村である事で、事質春から夏にかけて鰹釣り、 ている。ここで注意すべきはこの漁村が「年中漁稼」の可能で 柴を伐り出し諸廻船へ賣廻船之宿をも仕渡世仕申侯」と記され 村の渡世方につき「須賀利浦之儀年中漁稼仕申候尤漁間には薪 生産への依存は極めて低かつた。寛政五年の村明細帳にもこの 地であり、 八石八斗餘の村高を増加しているとはいえ、近世を通じて農業 記載はごく僅かしかみられぬ處から、近世初頭からこの村は農 帳によれば、 敷と同じく深い入江の奥に位置し、港としては惠れている。 出していたものと推測される。その後の新田開發によつて十 藩に屬していた。(註こ) 立地條件については附近漁村の大多 紀伊國牟婁郡須賀利浦は紀伊半島東海岸に面する漁村で和歌 し山地が迫つているため田畑は極めて少い。慶長六年の檢地 恐らくは漁業や廻船業、林業などにその生計の途を (註二) 附近數村の檢地帳にもこの村からの入作分の 村高僅か七石八斗餘、しかもその内大部分が屋敷 冬には名吉 (=ぼら)及び鮪網と 秋には鯖

> 漁村に比べれば年間の人口移動は遙かに少かつたものと思われ 比較的平均した勞働力を要求していた。從つて關東や裏日本の

(註一) 誌第四十六卷第七號所收〉の附近略圖を參照されたい。 村の移住と漁場の利用、支配の關係について「二田學會雑 なおとの村の位置については拙稿「近世における漁

へ誰こし 筆数は十三、 百姓家數五十六間。是に對し耕地は合計一反二畝であり、 屋敷地の高六石四斗餘、 所持者は僅か七人となつている。 反當の石付けは一石四斗、

年正月に大庄屋宛に差し出されている。大庄屋から潜へは恐ら **増減家敷船敷其外改書上帳」(註) なる題名を持つ調査書で、母** 次に主として利用した史料であるが、これは「八歳子惣人敷 今寬政二年戌年の書上帳を舉げてみよう。 各村の集計を報告したものであろうが詳細は不明で あ

**酉惣人數三百五拾六人** 

百七拾四人女 百八拾貮人男 以 內百三拾五人 上六 拾 歲以下 拾五歲

戍惣人數三百五拾七人

, 百八拾二人男 一 百三拾五人

以上六拾歲以下男

拾五歲

百七拾五人女

內三人男八歲子

嘉右衞門男子普齊寺 八歲 延藏男子同寺

志け松八歳 藤助男子同寺

> 一三之助 **止藏女子同寺**

八歲

甚之助女子同寺 八歲

潮藏女子同寺 ち

吉之丞女子同寺

ん 須賀利浦甚五郎忰ろく年三拾六歳相賀組小山浦庄七方 へ終付 八歲

證子 尾鷲組矢濱村傳之丞忰市松年拾七歲須賀利浦茂七方へ

武人たん病 武人さん後 武人せん氣病男 男 死人

戍年增 三拾軒

一家數五拾八軒 内拾六軒 拾貮軒 半役 武分半役

七艘 鰹船

貮艘 さつは船

近世における一漁村の人口動態

船敷拾三艘 貮帖 ゑさ網 てんと船 細魚網 いさは船

石者須賀利浦戍年 人數出入差引增減家數網數船數等相改申所如

名吉網 ゑひ網

戍正月

玉置元右衞門殿

れている。 一種の村明細帳とみる事ができる。 以上示せる如く、この書上帳は年々變動する項目を記載する なる。 從つて以下人口とあるはすべて八歳以上に限られるととに **蔵以上の者のみを記し、三年以後になつて漸く全人口を記** している。宗門帳、村明細帳その他についても同様である。 外されている。との史料も明治二年迄は人口については八 和歌山藩では七歳以下の者はあらゆる人口調査から除 今寬政五年九月の村明細帳と同年正月の書上帳を比 なおこの史料は以下單に書上帳と呼ぶ事にする。 明治年間には、 他により細密な村明細帳が差し出さ しかし、この史料の存在す

六五

姓敷が五十七を敷えるところから恐らくは無判の百姓は新しい主宗門改帳」に無判の者が若干名居り、それを除いた有判の百本稿では觸れないが、元祿十一年の名寄帳及び享保五年の「家 特高當作高書上帳」が作成されているのも決して偶然で はな 分家であり、この敷を含めるが否かにより宗門帳と書上帳乃至 年七月の村明細帳と同年正月の曹上帳には逆に全項目に亘る差 べてみると記載事項の數値はすべて同一である。 結び付けて考える事ができる。 帳の家敷は寛政士 の間に若干の相違がみられる。この相違は家敷になると更に著 調査内容の違いがあると言える。 異が認められ、その數は六ヶ月間の經過をもつては納得し難い て始めて理解されよう。寛政十一年にはこの村で「村中人別並 から一擧に八十二に増加しているが、これも前述の意味におい は村明細帳記載の家敷の相違が出て來るものと思われる。 のものがないので不可能であるが安永三年の宗門改帳は人數三 この年における新しい分家の法的な獨立が確認された事と これは明らかに記載內容の相違であろう。家敷については 前者では八十三を數えるが、後者では五十七となつて居 | 容の違いがあると言える。又宗門帳との比較は、同年代の開きであるところから少くもこの年の兩史料の間には 人となつて居り、同四年の書上帳の人數三百五十九人と 十二年に〈寛政十一年は史料飲〉五十八 書上

日は實際の須賀利浦のそれとは若干の點で相違がある。七歳以さてこのように家敷はさて置き、書上帳に記載されている人

てその趨勢を知るより外にない。つて、書上帳は殆んど唯一の人口統計史料であり、これによつって、書上帳は殆んど唯一の人口統計史料であり、これによつ連年に亘る宗門帳が未だ見出されないこの村及びこの地方にとは除かれるが、他方出稼中の者は含まれてしまう。(註)しかし下の者、それから地士、醫師、僧侶等特殊の階級を構成する者下の者、それから地士、醫師、僧侶等特殊の階級を構成する者

的一定している。 註) 出稼人及び廻船乘はこの時期を通じて十人内外で比較

## Ξ

きが決して増加の傾向を示してはいなかつた事を十分推測せしたものではない。しかし、近世中期におけるこの村の人口の動となつている。これらの諸指標は史料の種類が異るから一貫し 三百四十、 女百九十八を示して居り、次の安永三年の宗門帳による全人口 の鯨船一艘、鰹船十一艘を含めて合計三十四艘の漁船が存在し 少によつても裏付けられよう。寶永六年の史料はこの村に大型 める。この事はこの村における最重要の生産手段たる漁船の減 に四十四年後の實曆三年の村明綱帳は入敷三百九十八、男二百 と男二百七、 帳」を見出 須賀利村の人口敷につ 寶永六年に至り漸く全人口を書いた「加子米古 未 進 人為質利村の人口數についての初期の記錄は全く見 出 し 得 男百七十六女百六十三、不明一に對してはやや多數 し得るが、是により八歳以上の人口を算出してみる 女百六十 る。この數は實曆年間 九、合計三百七十六人となつている。 次 别

う。 うにこの村の狀態が最も衰亡していた時期と一應判 斷 し 得 よ外四年の十三艘に迄減少した。書上帳の始る安永四年はこのよ

以後の上昇期の二つに明確に分れている。勿論夫々の時期ともていない。表に見る如く安永――文化中期に至る停滯期とそれ年或いは翌々年の分をとつてあるから必ずしも五年每とはなつ人口變化を五年每に示したものである。但し史料敏如の分は翌次表は書上帳により安永七年から慶應四年に至る九十年間の次表は書上帳により安永七年から慶應四年に至る九十年間の

總數

376

男

192

女

184

(西曆)

代

安永 7 (1778)

飢饉は紀伊半島僻遠のこの地には人口の上で殆んど影響がみら若干の起伏は持つている。天明年間の關東・奧羽を中心とする

近世における一漁村の人口動態

病〉によるもの百四十五となつて居り、かなり多くの死亡者を病〉によるもの百四十五となつて居り、かなり多くの死亡者をなかつたのか。附近の地方的な中心をなす尾鷲(林浦、南浦、の内譯は、男四人の海上遭難によるものを除けば他の年と變りの八譯は、男四人の海上遭難によるものを除けば他の年と變りの八譯は、男四人の海上遭難によるものを除けば他の年と變りの十人內外の死人に對しやや高くなつている。天明五年の死人の十人內外の死人に對しやや高くなつている。天明五年の死人の十人內外の死人に對しやや高くなつている。天明五年の死人の十人內外の死人に對して、大年の十六はそれ迄れない。しかし、天明五年の死人二十一、六年の十六はそれ迄

ではこの寺別における真真別前人口の夢帯は可遠に退をもたらしたことになる。出したところから須賀利浦を含め一帶に若干の人口減

の關保上出生率は求むべくもないが、死亡率――勿論八歳以上める事ができよう。この藩の支配下にある村々からは史料記載

六七 二〇三五

れるように思われる。と言つてもその差はさしたるものではな育する者の率よりも、死亡率の高さにその停滯の眞因が求めら 二十八となつている。從つて是等三ヶ村では何れもこの時期に 早田浦が千人に付十二人、九木浦十七人、大曾根浦二十一人と である。是に反し每年八歳子として記載されている者の數は一 加に對し何故この村のみが停滯していたのかは書上帳のみをも なつて居り、他方八歳子の率は千人に付夫々二十九、二十三、 この死亡率は當時(安永) となつているのであろうが、その内容については後日を期した つては解明し難い。夫々の村の生産構造の差異が經濟的な原因 もたらしたが、急激な減少は來さなかつた。附近漁村の人口增 く、又他村からの人口流入はこの期間を通じて人口の停滯こそ 人口は四割以上も増加している。結局須賀利浦では八歳子に生 文化五年の四囘に亘つて居り、後年と比較してかなり頻繁 二十人以上の死亡者のある年は天明五、 の平均を算定してみると干 人に付二十三人であり、死亡率を遙か下廻つている。 -文化)の他村と比較してみると、 人に付二十八人となって

なる。前記の三漁村についてみても共に相當の減少を示し、慶說的には近世農村の疲弊期に當つて逆の現象が見られることに **應四年の數字は早田浦の如きは安永年間より下廻るといつた滅** なる。前記の三漁村についてみても共に相當の減少を示し、 さて須賀利浦は文化末期を境に急激に人口を増加させ、 の一時的減少も直ちに回復して明治に至るわけである。 通

> 時期の人口増加の内容について考察してみよう。 らの比較は後で觸れる事にして、 先ずこの

二十四人、八歳子は千人に付二十一人で、依然として自然減少 上の高さを示している。 その敷は入人一〇八、出人四〇、差引六十八人の增加で前期以 を見せている。この時期においても人口増加の主因となつたの 保十四年迄の二十五年間をとつてみると、死亡率は千人に付き ある。更に文化十五年以後、人口が一時的減退を示す直前の天 であり、この五年間にかなりの人口流入があった事が明らかで をみると入人三十二人に對し出人は九人、差引二十三人の增加は三十七人であるから自然增加は七人となる。他方人口の出入 つてもたらされたのだろうか。八歳子の合計は四十四人、 は自然減少を凌駕する人口の流入であつたことが注目される。 文化十年から十五年に至る五年間に三十一人の増加は何によ

明治に至る迄この痛手から囘復し得ないのであるが、 見せている。是等三ヶ村について言える事は共に天保七年から この數値は大きく、 を通じて平均約八%の村民が死亡している。更に尾鷲になると 八年にかけての飢饉の影響の相當强いことである。この三ヶ村 と減少し九木浦のみは五百八十八人から六百二十人へと増加を 人から二百二十七人、大曾根浦は百六十六人から百三十九人 同じ年代をとつて比較してみると、たとえば早田浦は三百 -九百三十一と二〇%近くを滅じている。そして尾鷺は以後い數値は大きく、天保八年の人口四千八百五十四は一年間に

ある。 比較的靜穩な狀態で災害の時期を通過した村すら存在したので 烟を絶つと言つた様な打撃を受けるものばかりではなく、逆に 生じたと思われるが、漁村と雖も決して信季の言う如く一村人 り遙かに輕少であつた。この事實は漁村における飢饉や流行病 ものであろう。又他の漁村においてもその打撃の想像されるよ は恐らくその地理的な孤立性が流行病による打撃を免れさせた 死者は死因に流行病とあり、飢饉で抵抵力の弱つた處へ傳染病 程の損害ではなく、翌々年には囘復している。この年の多數の に對しての意外に張い抵抗力の存在するものとして 注目 され の流行が加わつたものであろう。かかる時期にあつて須賀利浦 この年の死亡者數十九は平年よりやや高くはあつてもそれべると、この影響は天明時と同様殆んどない事が 立 證 さ れ 災害の著しかつた關東や奥羽においては刃論異つた結果を

の多くの村が衰退しつつあったのに引き替え、人口推移の上で かの經濟上の變化が想定されて來る。 これを文化以前と比較すれば如何にその數が減つているかが明 死者を出した文政五年を除いて、二十人以上の年は全くない。 察してみると、文化十五年以後慶應四年に至る迄、三十 は變動の少い經過をたどつている。これを死亡者敷をとつて考 天保の危機を無事に脱した須賀利浦は以後明治に至る迄、他 從つてそこには文化年間を境にこの村に起つた何等 一人の

事實この時期における漁業の發展は非常に大きいものがあつ

近世における一漁村の人口動態

年代は、 化年間を創始期と考えてよいのではなかろうか。この漁業につ ずつと後れて天保年間から記載しているのであるが、恐らく文 のみで普通の漁民一戸に付銀二百目近くにも達し、それ以前と たとは言え、村民全部に及び、その金額は多い年にはこの漁業 は收入の點で格段の相違を來した。 して經營されたため、利益分配は、勿論村の上層階級に多かつ いては別稿で詳論する積りであるが、村の共同漁業=地下網と 金 れはこの村における鮪網漁業の創業である。 大林雄也「大日本産業事蹟漁業及水産」、瀧本誠一・向 一書(能) によれば文政五年となつて居り、又書上帳は この創設の

井鹿松編「日本産業資料大系」第四卷所收)。

この事實だけに求めるのは困難であり、多くの複合した理由に 益が村民一般に分配される場合、 鮪網漁業の存在が果した役割は大きい。勿論人口増加の理由を 漁村を問わず決定的なものがあつた。 あつて、その人口を維持し増加させた重要な要因として、この よるものであろうが、このように利益の多い生産の存在は、 ケ浦には存在していない事で、幕末における一般的な疲弊期に しかも注目すべきはこの漁業が前述の早田・九木・大曾根三 村の生活に與えた影響は、

力の强い村であつたと言う事ができる。 のように、安永以後を通じて、須賀利浦は極めて人口吸 死亡率は他村に比し

(十三〇二)

明せる者の種類・男女別を示すと次表の如くになる。 特に目立つて高いものではなかつたが、常に八歳子の率を上同れては考えられない。安永四年から明治二年に至る 全 移 動 敷しては考えられない。安永四年から明治二年に至る 全 移 動 敷しては考えが流出している。 中国浦・九木浦は他村との出入は少くたる。 この数は附近の漁村に比し、逆の關係を示すものである。

計	不殺良リ	引越	卷	緣付	
			九八		男
二 五 二	<b>H</b> .		五六	八〇	女
二六五	t	二 四	一五四	八〇	合計

五一七 四 四 〇 門 る内 家 組 の 倒 の 入 の 人 の 次 に み 成 に み の 内 の 入 の 表 に 水 の 内 の 表 に 水 が の た 級 い 歴 が に よ

縁組と、それによる新しい分家の創設を活發にし、文化十年かに文化末期以後におけるこの村の漁業發展は、他村からの養子かなり廣範圍から養子を求める大きな理由となつた。しかも特比し八歳子に生長する者の率が少い事は「家」の繼承のため、

めている。 ら文政六年に至る十年間に家數を八十五から百一へと急増せし

A が、流出人口についてもその内容、範圍は殆んど同程度るが、流出人口についてもその内容、範圍は殆んど同程度(註) 本稿では流入人口のみについてその内容や範圍を述べ

他方是に比して引越しは九十年間を通じ僅か八件二十四人のみであり、しかもその内には數年を出でずして再び他の村へ越みであり、しかもその内には數年を出でずして再び他の村へ越高子級組を通じての分家創設による家數の増加は容認 し 得 てかなかった。共同體的意識の强い村にとつて、他村かからのも、この血緣關係に基ずかない他所者の移住は決して好まなかも、この血緣關係に基ずかない他所者の移住は決して好まなかった。しかし少數ながら移住者は見出されるし、是等の人々が如何にして村の生活に融け込んで行つたかは興味深い問題であった。しかし少數ながら移住者は見出されるし、是等の人々が向にして村の生活に融け込んで行つたかは興味深い問題である。

村との出入關係の方向こそ問題となると言う事を示すものであろか。逆に附近の大曾根浦の如きは文化以後人口を滅じてあろうか。逆に附近の大曾根浦の如きは文化以後人口を滅じであろうか。逆に附近の大曾根浦の如きは文化以後人口を滅じであろうか。逆に附近の大曾根浦の如きは文化以後人口を滅じたれらの事實は、自然的な人口典に勝つていた事實は何を意味するの他村に比較して富裕になったにも拘らず、自然的な人口變動は他村に比較して富裕になったにも拘らず、自然的な人口變動は不いるが、それは自然情加に上廻る流出人口の大きさによった。

かは判明しない。 率の低さによるものか、或いは又幼兒死亡率の高さによるものる。しかし、須賀利浦における八歳子敷の少さは、果して出生

陸上交通に對して海上交通の便宜さから來る結果であろう。 過剩人口の捌け口だつたのかも知れない。この年代を通じて最 も多いのは、古の本村の四十五人であるが、この村は海には面 逆にこれらの農村にとつては、こう言つた吸引力の强い恐村は からは少く、却つて農村、それもやや離れた農村から多く來て 河・大和・淡路・京都・大阪、遠く越中から一二人宛となつで の内、同じ紀州の新宮、田邊方面から十數人、伊勢・志摩・三 から八十八人、尾鷲二十八人となつている。殘りの三十 古の本村を中心とする農村地帶と結ばれて 間には更にそれよりも少くなつている事は、少くも人的關係に 又次に多いのは引本浦の三十七人であるが、この村は古の本村 せず「田畑耕作一通に而渡世仕候もの」の多い農村であつた。 いる。從つてかなり匱い範圍と通婚しているわけであるが是は と、附近の漁村から七十二人、半農半漁村から四十六人、 と共に他の大庄屋管轄區域であり、最も密接なるべき尾鷹との いる事である。これらの農村の狀態は全く判らないのであるが 最後にこの村の他村との人口出入の範圍を述べて本稿を結び 注意すべき事は、附近村との養子縁組の場合、同じ漁村 前記二百六十五人の内譯を男女通算して地域別にみる この村が同一の組内よりも、隣の相賀組の引本浦や、 いた事を示してい 人餘り L

> 係が薄かつた事を示すものである。 えて、人口の洗入が、地理的な、或いは又政治的な位置とは關えて、人口の洗入が、地理的な、或いは又政治的な位置とは關

料に據つた。集の全國漁業制度資料及び德川林政史研究所所藏の史明記 本稿において使用せる史料は日本常民文化研究所収

近世における一漁村の人口動態